

田中隆尙撰集

第十一卷

田中隆尙撰集 第十一卷

平成十八年八月十五日印刷
平成十八年八月二十五日發行

著 者 田 中 隆 尙

發行者 唐 澤 明 義

發行所 展 望 社

郵便番號一一二・〇〇〇二

東京都文京區小石川三・一・七

エコービル二〇二

電 話 〇三(三八一四)一九九七

FAX 〇三(三八一四)三〇六三

振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト

ISBN4-88546-155-3

紀行三

目次

へらす宵宴

上の巻

.....七

下の巻

.....二九〇

編集覺書

.....五六九

へらす宵宴

上の巻

まへがき

わたしは指定の時刻に駐日ギリシア大使テミストクレス・フリサントプロス氏をたづねて、サモスの藝術協會會長コスタス・プチイニス氏から招待されてサモスで講演することになつてゐるので、できれば大學でも講演したいといふことをいつた。大使はプチイニス氏の招聘状と新聞豫告を一見して、わたしのさしだした二十四枚のギリシア語の講演原稿に目をとほし、「ふむ、ふむ」とか、「おもしろい」とかいひながら、あやまりをなほしていつた。

「おもしろい。たいへんおもしろい。これは大學でも講演していただくやうにとりからはからひませう。」大使はよみをはつて、さういつた。ここにおほきな關門があつた。そしてわたしはそれを無事に通過したのを感じた。

「ほかになにかご希望は。」

「ギリシアには大學が四つあるさうですが、その四つでしたいとおもひます。」

「承知しました。この原稿はいま全部はなほしきれませんが、ルソオス君に見てもらつておきませ

う。おあづかりしておいてよろしいでせうね。」

そのうち大使はギリシアに歸國し、しばらくして日本にかへつてきて、わたしをよびだした。

「大學の講演のことは萬事手配しておきました。アテネにいらしたら、こちらをおたづねになつてください。」

さういつて大使はちよつとした紙片にギリシア文字のつづけ字でなにかをはしり書きした。

「たいへんありがたうございました。それからもう一つおねがひがあるんですが。サモスには十六ミリの映寫機がなく、三十五ミリのフィルムをもつてきてくれといふんですが。大學には十六ミリでなくては、もちあるきができないし、三十五ミリと十六ミリと二つもつてゆかなくてはならないんです。さうすると、おなじフィルムが二つになつて税關で問題になるさうですし、三十五ミリ自體が營業用として税關で。」

「わかりました。大使館からおくるやうにしませう。」

これはあつかましい依頼かとおもつたが、大使はいとも氣がるに、太鼓のやうな三十五ミリのフィルムの罐をうけとつた。わたしはもう一つ依頼すべきことがあつた。公文書でなくても、大使のこの差配をあかす文書がなにか必要ではないかとおもつたのである。わたしはそれをきりださうとして、ぐづぐづしてゐた。

「まだなにかご希望でせうか。」

大使はわたしのことをまたずにさういつた。「まだ」にはあきらかに「このうへ」といふ意味が

ふくまれてゐた。たしかに大使の手配は十分のはずであつた。しかしこの書きながしの紙片が、なかのあかしになるだらうか。ただの所番地にすぎないのではあるまいか。わたしは一抹の懸念をのこしながら、これ以上要請することもできず、禮をいつて退出した。

昭和四十八年九月十九日 水曜 出發 晴

午後二時四十五分羽田空港發のエジプト航空の飛行機は、おくれて三時二十一分に發し、離陸すると急上昇して、海岸に石油タンクがならびたち、かすんだ東京灣に船が數隻もやひしてゐるのがみえた。白雲がところどころにうかび、そのあひだに海と陸がみえ、やがて村落のうへをとほると、もう山地になつて、うつくしい青山のうねりがつづき、右手には白雲が雪原のやうにうづまいて、そのはるかかなたにちひさな富士山のすがたがあらはれた。左がはの座席に白人の女性とならんでゐた日本人らしき人が英語でわたしに「富士山がみえますか」といつてよつてきた。わたしはこれは日本人ではないとおもひ、また三人のドイツ人とたくみにドイツ語で話してゐたので、どこの人かときくと、韓國人で、ドイツに八年留學したことがあり、同伴のドイツ婦人と結婚したといふ。左がはの席の外人も日本人も右の窓にいつせいによつてきて、ながめたり寫眞をとつたりした。そのちひさな富士はいつかうにおほきくなることなく、日本の國の象徴のやうに、とほくの白雲のうへにすわつたまま、ただきがめづらしくあをい。

飛行機はしばらく海のうへを飛んでゐたが、いまは白雲の谷間にいくつも山がおきてゐて、陸にそつて飛んでゐる。海と陸との界をなす砂濱がみえるが、その砂濱はちやうど野道のやうにあかるい。

白雲はいつのまにか一面にうづまつて、羊のむらがりのやうだとおもふと、たひらで干割れたやうなところもある。その白雲のうへの空は濃青^{かさぞ}で、なんとなく人のここにせまつてくる。底知れぬくらすをおびた青といつてもいい。とことはの青といつてもいい。白雲はやがて人にふみあらされた雪原のやうになり、むらがりになかに一つおほきくたちのぼつて、それがくづれ、きのこ雲のやうになつて天をおほつてゐる。

かなりたつて西方の白雲は黄いろくかがやきわたり、山のうへのお花畑のやうになつた。まだ夕方のやうな氣がしないが、日がもうかたむき、日本はすでに、とほくはなれたのであらう。黄雲の原にまきたつた雲はくづれて、それがあやしいかげをおびた。

六時四十分ごろ太陽がみえ、飛行機はむらくものしたにおりて、蜘蛛手のやうに八方に岬をのぼした香港島にちかづいていつた。あたりには大小の八十島がうかんで、人の住まぬ島がおほく、そこをとほつてやがて高層建築の林立した本島にさしかかり、建物のすぐうへを飛んで七時十五分に着陸した。そとはまだあかるい。くだんの韓國人夫妻とドイツ人三人は、香港を見物してゆくといつておりていつた。

さきへゆく客もみな一旦おりて、通過客待合室でめいめいやすんだり、みやげもの屋で買物したりした。さきほどあかるかつたのに、七時四十五分に飛行機にもどつてくるとうすぐらく、八時七分に飛行機が滑走路にむかつて移動しはじめたときは完全にぐらくなつてゐた。八時十五分に飛びたち、香港の燈火が青や赤の珠數のやうにみえたが、それもわづかのまで、まもなく闇にはいつてしまつた。

眞夜中の十二時にバンコクについた。バンコク時刻で十時である。通過客待合室にはいると、みやげもの屋に象牙細工やタイの民藝品がならんでゐて、異國にきたといふ、おもひをかきたてられたが、それはむしろ男女の賣子の顔が、顔だちは日本人とさしてかはらないのに色がとみに褐色をまして、人種のうつりかはりがめだつたからであらう。

バンコクまでは機内はがらあきで三人分の席になれてよかつたが、バンコクでタイ人の團體のりこんできてさうざうしくなつた。この人たちもかなり色がくろい。十一時四分にバンコクをたつた。わたしのところだけ、三人席にひとりだけだが、ひとりだけながとなるのも氣がひけて、すわつたままでゐた。ちかくにゐた團長が英語で外國人としやべつてゐたので、きくと、ボンベイ見物の團體だといふ。

九月二十日 木曜 アテナイ着

バンコク時刻二時四十分、ボンベイ時刻一時四十分、ボンベイについた。まつくらの空に上弦の月がおちかかつてゐる。タイ人の團體はおきてゆき、さきにゆく客は機内でまつてゐよといふので、みながけたままであると、數人のインド人の掃除夫がはいつてきて、床の紙屑をはけであつめ手でひろつた。この人たちはタイ人よりさらにくろい。そこに青や茶や黄の巻頭巾をまいたインド人がたくさんゐる。りこんできて、機内は異様な光景になつた。顔もくろいが、骨つきがかはつてきて、のつべりとしたところをうしなひ、東洋人より西洋人にちかくなつたといふ感じがした。これで機内はほとんど

満員になった。

二時五十二分に出發した。街すぢの燈がてんとみえたが、その他はくらくて、なにもみえない。わたしのとなりはインド人のちひさな、おうながすわり、そのとなりに娘か嫁らしき人がかけた。いつの食事かわからぬが、何度目かの食事がくばられ、インドの人たちには肉がでずに精進料理になつてゐる。なかなか氣をつかつてゐる。わたしはこのしわふかい、おうながとなりにすわつたときから色はちがふが他人のやうな氣がせず、安全帶のつけかたや、食事のための臺のおろしかたなど手つたつて世話した。おうなとわたしとは、ことはぜんぜんかはさないにかはらず、安心してわたしのなすがままにまかせてゐる。それがそのむかうの娘らしい人にも通じて、そのたびに會釋して感謝の意を表してゐる。通路をへだててむかうには巻頭巾をまいた、つれの男がかけてゐるが、たぶん夫であらう。しかしこの人とは距離があるので感情の交流はぜんぜんない。この家族もほかのインド人と團體でどこかに見物にゆくのであらうか。おうなはこんな飛行機の旅にはじめてでるのであらう。

それからだいぶねむつて、そとを見ると、海のほのあかりがあり、空には北斗七星がややひくくかがやいてゐる。夜はまだいつかうにあけさうになく、この十方くらやみのなかに光をはなつ北斗七星はただそれだけで默示であり、啓示である。すでにアラビアがちかいのであらう。海と陸との界のやうなところにさしかかつた。

その默示の光も視界からさつて、かなりのあひだうとうとしてゐると、突然飛行機が速力をおとしてくだりはじめた。時間がまだはやいやうなので、時刻表には書いてないが、カイロのまへに一つ

着陸するのかとおもふ。しかしなんの放送もせず、機内はくらいままである。ますます速力をゆるめてひくくくんだり、しかも帯をしめよともいはない。なにごとかおこつたかとおもふと、しばらくして電燈をつけて、帯をつけよといった。八時十五分になつて、まだくらいうちにカイロについたのであつた。

カイロが終點なので、ここでのりかへるために通過客待合室にはいると、そこはじつにさまざまの人種の服裝の展覽をなしてゐる。巻頭巾をしたインド人、桃いろや紅などの裾をひくまでながい衣をまとつたインド婦人、すつぱりと身をつつんで裾をたれた空港のエヂプト人掃除夫、そのほかアラビア人らしいしろい服をきた人などがあるいはたむろし、あるいはゆききし、あるいはたちはたらいてゐる。そのエヂプト人掃除夫は手で屑物をひろひあつめてゐるのである。わたしは地下の便所をさがしてはいり、小用をたしてゐると、そこに掃除夫がつかつかとやつてきて、ちり紙をおいてさつていった。顔をあらつてゐると、またべつの掃除夫がきて手ぬぐひをおいていった。わたしがまだあらひをはらず、まだその手ぬぐひをつかひもしないうちに、またべつの掃除夫がきて、その手ぬぐひをとつて、べつのあたらしい手ぬぐひをおいていった。みな心づけをくれといふものとおもひ、でがけにゆきあつた掃除夫に、五十圓硬貨をあたへたが、日本の錢といふことを見てとつて、これはいらぬといつてとらない。べつにエヂプト錢も要求もしない。

待合室の一隅に日本人のわかい女が四人たむろしてゐたので、そこへいつて話した。四人ともおなじ飛行機できたので顔はたがひに知つてゐたが、そのうちの三人は聲樂の勉強でウインに留學してゐ